



2012年8月8放送

## 「ペットを介して広がる感染症」

酪農学園大学獣医学群獣医学類 食品衛生学ユニット教授  
田村 豊

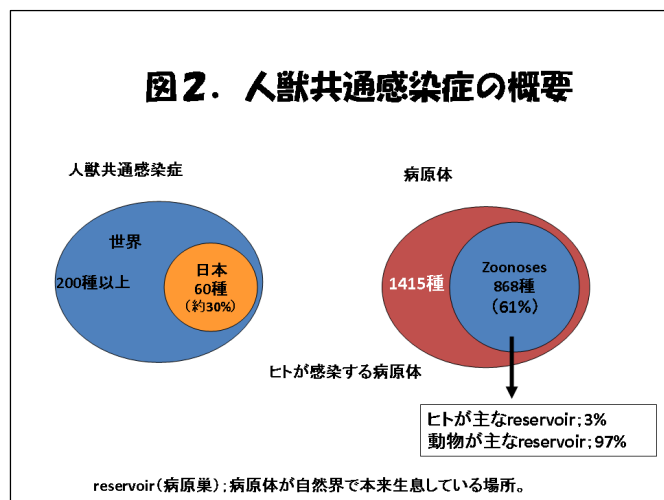
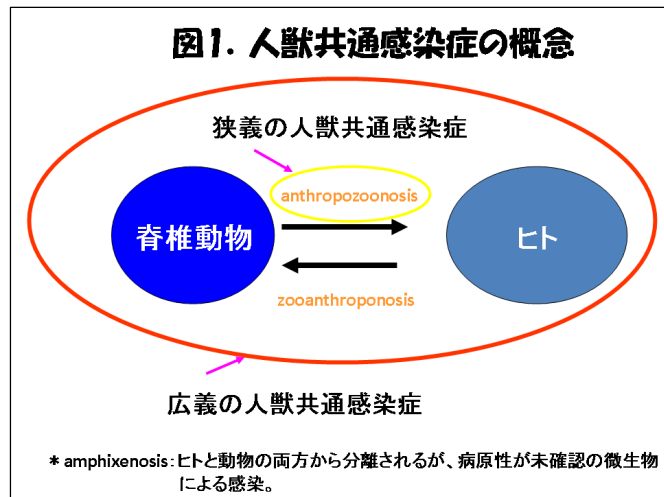
### 人獣共通感染症とは？

本日は、ペットを介して人に感染する感染症のお話をさせていただきたいと思います。

脊椎動物と人との間で自然に伝播する感染症は人獣共通感染症と呼ばれます(図1と2)。人獣共通感染症は地球上に200種以上が知られていますが、わが国で確認されたものは約60種です。Taylorらは2001年に人に感染する病原体は1,415種存在し、その61%に当たる868種は人獣共通感染症の病原体であると述べています。また、病原体の97%は人以外の動物を病原巣としており、人獣共通感染症の病原体の多くは動物から人へ伝播しているものと思われます。

### ペットの飼育状況

最近、ペットは愛玩動物というより飼育する人と同格な存在である伴侶動物と呼ばれることが多く



なってきました。ペットは伴侶動物として人と最も身近に生活することを考えれば、時に最も危険な感染源に変身する可能性があると考えられます。ペットフード協会が調べた2011年のペット飼育率をみると、犬、猫などいずれかのペット飼育率は37.9%となっています。ペットの中で飼育率が高いのが、犬17.7%と猫10.3%となります。飼育数でみると、犬で約12,000千頭、猫で約9,600千頭という統計もあります。最近、従来のペットに加えて、爬虫類などの珍しい野生動物（いわゆる、エキゾチックアニマル）を飼育する人が増えています。しかし、エキゾチックアニマルはまさに野生動物であり、犬や猫に比べて未知の病原体を保有する可能性が考えられ、その飼育には細心の注意が求められます。

## ペットから伝播する人獣共通感染症の現状

人における人獣共通感染症の疫学成績が少ない中、2001年に地域は限定されますが医師へのアンケート調査成績が公表されています（表1）。神戸市医師会会員と福岡市医師会会員の合計4,398人を対象として、1,939人44%の回収率での成績です。その結果、もっとも多いのが猫ひっかき病で、次いでオウム病、皮膚糸状菌症、トキソプラズマ症、サルモネラ症が続きます。媒介動物は圧倒的に犬と猫が多く、飼育状況が反映された結果となりました。

表1. 人獣共通感染症における医師のアンケート調査

順位	感染症	媒介動物	診断数(n=365)
1	猫ひっかき病	猫	126
2	オウム病	鳥類	87
3	皮膚糸状菌症(白癬)	犬, 猫, チンチラ	57
4	トキソプラズマ症	犬, 猫, 豚, 鳥	49
5	サルモネラ症	ミドリガメ, 金魚	21
6	カンピロバクター症	犬, 猫, 鳥	18
7	クリプトコッカス症	鳩	11
8	回虫幼虫移行症	犬, 猫, 豚	10
9	疥癬	犬, 猫	5
10	バスタツラ症	犬	1

\*診断数には疑陽性例を含む。感染症は上位10位のみを記載した。

内田幸憲ら, 感染症学雑誌 75:276-282, 2001より改変

## ペットから人への感染経路

ペットから人へのさまざまな感染経路が知られています。ペットのかみ傷やひっかき傷から病原体が体内に侵入する経皮感染、ペットに触ることで感染する接触感染、ペットの便で汚染された食べ物や水から感染する経口感染、空気中に飛散した病原体による飛沫感染や、空気中の病原体を吸い込むことによる空気感染、さらには動物が持っている病原体がノミやダニ、蚊などの節足動物を介して感染する経路などです。この内、もっとも多く、重要な感染経路はかみ傷で、そのほとんどが犬によるものであることが知られています。

## 猫ひっかき病

次に、我が国で人が感染する可能性が高い人獣共通感染症について要点のみを簡単に

説明したいと思います。

猫ひっかき病は、主に *Bartonella henselae* を病原体とする細菌性の人獣共通感染症です。主として、猫によるひっかき傷部位のリンパ節に亜急性の腫脹を起こします。特に小児に起きることが多いといわれています。腫脹するリンパ節は、腋下、頸部、下顎、耳介前部、鎖骨、あるいは鼠径リンパ節であることが多いとされます。なお、本菌に感染した猫はほとんど臨床症状を示さず、数か月から数年にわたって菌血症を示すことが知られています。猫間の伝播はノミによって行われます。飼い猫の1割が本菌を保菌するとの報告がなされています。

### オウム病

次に、猫ひっかき病に次いで多いオウム病について説明します。

オウム病はオウム病クラミジアである *Chlamydophila psittaci* による呼吸器感染症で、感染症法では全数届出の4類感染症に指定されています。オウム病クラミジアの自然宿主は鳥類で、飼育状況で異なるものの我が国で飼育されている鳥の0~30%が保菌していると報告されています。人は感染した鳥の排泄物、汚染羽毛、乾燥糞による塵埃を吸引することにより感染します。

### 皮膚糸状菌症

次に、ペットが保有する皮膚糸状菌によっておこる皮膚糸状菌症について説明します。人や動物に感染する皮膚糸状菌は約20菌種知られています。その内、犬や猫から感染する *Microsporum canis* が重要視されています。特に、小児に発生することが多いとされています。頭部には鱗状で乾燥した病変をつくります。手、足の場合は、円形で紅斑性、境界明瞭な病変をつくるので容易に診断できます。

### トキソプラズマ症

次にトキソプラズマ症について説明します。トキソプラズマ症の病原体は、*Toxoplasma gondii* で、猫の糞便から排泄されたオーシストを、人は経口的に摂取することにより感染します。オーシストを排泄するのは子猫が多く、猫の1%がオーシストを排泄しているとの報告があります。オーシストを排泄する猫は一般に無症状であるといわれています。人のトキソプラズマ症には先天性感染と後天性感染が知られています。先天性感染は、母体が妊娠中に初感染を受けた場合にのみ成立します。早期流産のほか、子供は痙攣性の四肢麻痺、リンパ腺炎、肝腫大、貧血や黄疸の症状がみられ、死亡することが多いとされています。後天性感染の場合は、リンパ節炎や脈絡網膜炎を起こすことが多いとされています。

## サルモネラ症

サルモネラ症の原因であるサルモネラ属菌は、動物、食品、環境などに広く分布します。人の感染源となる動物として犬と爬虫類が重要視されています。犬は各種のサルモネラを高率に保菌することが知られています。また、ミドリガメは人に病原性のあるサルモネラを高率に保菌し、しばしば小児のサルモネラ症の感染源となります。

## 予防対策

ペットから人獣共通感染症を防ぐには、さまざまな対策が求められます。

### (1) 感染源に対する対策

予防対策の中で、最も根本的な対策は感染源であるペットに対する対策であるといわれています。健康なペットから人獣共通感染症に感染するリスクは極めて低いものです。

まず、心がけるのは衛生的な飼育管理を実施するということです。具体的には、ペットの体表や肛門の周りを常に清潔にすることや、ダニやノミを定期的に駆除することです。また、衛生的なエサや水を与えることも重要です。エサはできるだけ新鮮なものを与えるようにし、加熱処理をしていない生肉は与えないようにする必要があります。

### (2) 感染経路に対する対策

ペットから人への感染経路については先に述べたとおりです。感染経路の遮断は最も有効な予防対策であるものの、ペットが人と密接な関係を築いている現状を考えると、難しい面も多いことも事実です。したがって、ペットと適度な距離を置くようにし、感染リスクを下げることに主眼をおくことが重要に思います。具体的には、ペットとキスをしない、口移しでエサを与えない、一緒に寝ないなどです。また、ペットの爪を切ることや、ペットと触れ合った後に直ぐに手洗いを励行するなど重要なことです。

直接的な感染経路とともに、間接的な感染経路も重要です。特に、ペットの糞便などの排泄物は感染源になりやすく、これらを速やかに適切に処分することは大切なことです。さらに、カメなどの水棲のペットに使用した飼育水の廃棄を台所で行うとサルモネラ等の感染のリスクが高まるので、絶対に避けるべきです。

### (3) 人に対する対策

人獣共通感染症の人に対する予防対策として考慮すべき点は、何らかの原因で免疫機能が低下した易感染宿主に対する対応であると考えます。免疫機能が正常であれば何ら問題ないのですが、易感染宿主では通常の接触の範囲内でもペットから病原体が感染して重症化する可能性があります。人獣共通感染症の病原体の中にも、トキソプ

ラズマ症やクリプトコッカス症など多くの日和見感染症の病原体が含まれています。

また、やむを得ない場合を除いてエキゾチックアニマルや野生動物、サル類はさまざまな人獣共通感染症の病原体を保有する可能性があり、ペットとして飼育すべきでないと考えられます。特に易感染宿主であればなおさらです。

以上、ペットを介して感染する感染症について概説いたしました。現代の複雑な社会を生きる上で、今や人と生活を共にするペットは掛けがえのない存在になっています。一方、ペットは人獣共通感染症の感染源にもなる存在です。正しいペットとの付き合い方を習得し、ペットとともに充実した毎日をお送りいただけることを心からお祈りいたします。